

談話機能から見た冠詞

談話機能という点から見れば、冠詞は定と不定に分けられる。ふつうの教科書的な説明では、ある人・物を初めて話題にするときには不定冠詞を使い、二度目からは定冠詞を使うとされることがある。次の例のようなケースである。

(1) J'ai acheté *un* parapluie et *un* chapeau, mais j'ai oublié *le* parapluie dans le bus.

「私は傘と帽子を買ったが、傘はバスに忘れて来た」

(2) J'ai acheté *du* fromage et *des* tomates. *Le* fromage était bon, mais *les* tomates étaient à moitié pourries.

「私はチーズとトマトを買った。チーズはおいしかったが、トマトはなかば腐っていた」

例(1)の *le* parapluie は最初に出てきた *un* parapluie と同じものをさす。例(2)の *le* fromage も最初の *du* fromage と同じものである。このように定冠詞にはさすものをそのまま引き継ぐという性質があり、言語学では前方照応的用法と呼ばれている。

ここで不定冠詞 *un* も部分冠詞 *du* も、同じ定冠詞 *le* で引き継がれていることに注意しよう。前々回で宿題を出したが、不定の領域では可算と非可算を区別する冠詞が、定の領域では区別がなくなる。これは *j'ai acheté un parapluie / du fromage* と言った時点で、買った傘とチーズがどれであり、またどれくらいの量であったかが決まるからなのだ。ものの輪郭と量が決まってしまうと、それが数えられるか数えられないかは関係なくなる。全体をさして「それ」と言えば済む話だ。だから定の領域では、可算も非可算も同じ定冠詞 *le* で受けられる。可算・非可算の区別に関わる冠詞の認知機能が、不定の領域でしか働かないのはこのためなのだ。

定冠詞は聞き手に優しいしくみ

さて、不定冠詞と定冠詞の使い分けについて、次のような一歩踏み込んだ説明がされることがある。これは言語学がかなりわかっている人の説明である。

「不定冠詞つき名詞は、さしている人・物がどれであるかが聞き手にわからない状態を表わし、定冠詞つき名詞は聞き手にわかっている状態を表わす」

この説明からふたつの重要な点を引き出すことができる。ひとつは、例(1)(2)にあげた前方照応的用法は、「どれをさしているのかが聞き手にわかっている状態」の単なるひとつのケースに過ぎないということである。例(1)(2)ではひとつ目の文で傘やチーズがすでに登場しているので、*le* parapluie / *le* fromage と定冠詞がついたとき、「話し手である私買った傘 / チーズ」と特定できるわけだ。言い換えれば、すでに話に登場していなくても、聞き手にどれをさしているかがわかれば定冠詞を使ってもいい(もしくは使わなくてはならない)ということになる。次の定冠詞の用法はこれで理解できる。太陽やフランスという国はひとつしかないのだから、どれをさしているかは明らかだからである。「唯一物をさす定冠詞の用法」と呼ばれている。

(3) *Le* soleil se lève à l'est. 「太陽は東から昇る」

(4) *La France est un pays agricole.* 「フランスは農業国である」

もうひとつの重要なポイントは、「冠詞は聞き手のためにある」という点である。私が自動車を一台買ったとする。私にはどの自動車を買ったのかはわかっている。だから、「私は自動車を買った」と誰かに自慢したいとき、× *J'ai acheté la voiture.* と言えるのだと考えたら大まちがいののである。私にどの自動車かがわかっていることが問題なのではない。聞き手であるあなたにわかっているかが問題なのだ。あなたはまだどの自動車か知らない。言う前に知っていたら超能力者だ。だから私は *J'ai acheté une voiture.* と言わなくてはならないのである。

「いまさら何をあたり前のことを」と感じた読者がたくさんおられると思うが、いま一度立ち止まって考えてみよう。私はこの事実の意味するところは、非常に広く深いと常日頃考えている。なぜなら、もしこの考え方が正しいとしたら、私は聞き手が何を知っていて何を知らないかを、常に考慮しながら話しているということになるからである。言語のこのような性質を、私は「聞き手目当て」と呼んでいる。ここで「目当て」というのは、「それを目標として働いている」というほどの意味である。言語は私だけのものではない。いわんやあなただけのものでもない。私とあなたのものであり、私とあなたのあいだで働くものである。難しい言葉を使うと、これを言語の「相互行為性」という。

このような考え方を採ると、やっかいな問題がひとつ生じる。それは、私は「あなたが知っている」ということを、どのようにして知ることができるかという問題である。私は読心術を使えないので、あなたの心のなかを直接に知ることはできない。ならばどのようにして知るのがか。これは言語学や哲学では「心の理論」*théorie de l'esprit* 問題として知られている難問である。この連載では哲学を論じることが目的ではないので、ここではおおざっぱに、あなたと私の共通体験やその他の事情を考慮して、私は「ここまでは知っているだろう」と推測すると考えておく。

「知っている」というのはどこから来るか

かくして「どれをさしているのか聞き手にわかっている」状態を定冠詞の使用の基本と仮定する。「わかっている」理由は大きく分けて次の三つしかない。「前から知っている」「さっき聞いたから知っている」「目の前にあるのでわかっている」の三つである。補足的ケースとして、「聞いたことからかんたんに推測できる」を加えると、定冠詞の用法はほぼ説明できる。あとはそれぞれの応用問題に過ぎない。ただし、ここで考えているのは [le + 名詞] という単純な形に限る。

まず最初の「前から知っている」のいちばんかんたんなケースは、例(3)(4)の世界にひとつしかないものをさす用法である。「太陽」といえば子供でも知っているので、「この世界には太陽がひとつあって」といちいち説明する必要がない。いきなり *le soleil, la lune, le ciel, la mer, la Tour Eiffel* と定冠詞をつけるのがふつうである。このなかには、*le loup* 「狼」、*l'homme* 「ヒト」、*l'or* 「金」のように、定冠詞単数で種や類の全体をさす総称用法が含まれるが、これは後でまた見ることにする。

次に、「今さっき聞いたから知っている」というのは、すでに例(1)(2)で見たいわゆる前方照応的用法なので、これ以上説明の必要はなからう。ただし、冠詞という話題を離れれば、一度出てきた名詞、たとえば *un chien* 「犬」を二度目にどう受けるかは、定冠詞を用いた *le chien* 以外に、*ce chien* 「その犬」、*il* 「それ」、*l'animal* 「その動物」、*cette pauvre créature* 「その哀れな被造物」などいろいろあって、意外かもしれないが定冠詞の *le chien* で受けることは実際には少ない。だから、

例(1)(2)には不自然にならないよう工夫が凝らしてあるのだ。暇な方はどんな工夫か考えていただいてもよからう。また上にあげたいいろいろな受け方には使い分けがあり、それぞれ微妙にニュアンスがちがう。お約束はできないが、もし時間の余裕があったらまた触れてみたい話題である。

次に三つ目の「目の前にあるのわかっている」ケースである。

(5) [部屋に入って来た人に] *Ferme la porte.* 「ドアを閉めて」

(6) [自動車に轢かれそうな人に] *Attention à la voiture!* 「車に気をつけて！」

「閉めて」と頼んだドアは今その人が開けて入って来たドアである。また例(6)の *la voiture* はその場で今にもぶつかりそうな車である。このような定冠詞の用法には見かけより複雑な問題が隠されているのだが、ここではこれ以上は触れないで、この通りだとしておこう。

さて、最後の補足的ケース「聞いたことから推測できる」である。

(7) *Je vais donner ma voiture à réparer. Le carburateur ne marche pas bien.*

「車を修理に出そうと思う。キャブレターの調子が悪いんだ」

le carburateur 「キャブレター」がどのキャブレターをさしているかは明らかである。私の自動車のキャブレターであって、それ以外のものではありえない。人の車のキャブレターの調子が悪いからといって、自分の車を修理に出す人はいない。この場合、「自動車にはふつう(ひとつだけ)キャブレターが付属している」という知識が働いて、*le carburateur* の正しい指示が定まる。だから、これは定冠詞を使う第1のケース「前から知っている」の応用問題である。

さて、これで定冠詞の使い方はすべて説明できるだろうか。申し訳ないことだが、問題はそれほどかんたんではないのである。次の小説の書き出しを見てみよう。

(8) *Elle ouvrit les yeux. Un vent brusque, décidé, s'était introduit dans la chambre. Il transformait le rideau en voile, faisait se pencher les fleurs dans leur grand vase, à terre, et s'attaquait à présent à son sommeil.* (F. Sagan, *La Chamade*)

「彼女は眼をあけた。風が突然、決意したように、寝室にはいつてきたのだった。風はカーテンを帆に変え、大きな花瓶の花を床の方へかしげさせ、いま彼女の眠りに襲いかかっていた」(朝吹登水子訳、新潮文庫)

les yeux の定冠詞は「人には複数の眼がある」という知識から引き出されたもので、(7)と同じ原理だからこれはわかる。だが残りの定冠詞は説明できない。*la chambre* は読者にとっては、前から知っているわけではないし、すでに話題に出たものでもなく、眼の前にあるものでもない。これはどうしたことだろうか。サガンは冠詞を正しく使っていないのだろうか。ここにフランス語の隠れたしくみがあるのだ。くわしくは次回をご期待いただきたい。(とうごう・ゆうじ)